

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/07/03

米利上げ継続スタンスに市場は半信半疑

通貨ペア	基調		ページ数
ドル/円	➡	米経済指標に一喜一憂 予想レンジ: 109.500~115.000円	2-3
カナダ/円	➡	利上げ期待急浮上 予想レンジ: 84.500~90.700円	4-5

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



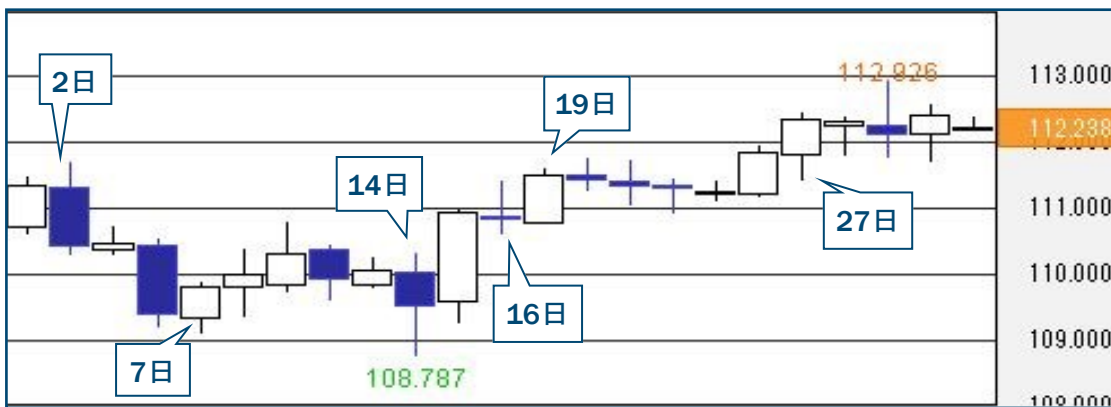
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2017Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD/JPY

ドル/円 6月の推移

6月のドル/円相場は108.787～112.926円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.5%上昇(ドル高・円安)した。トランプ米政権のロシアゲート疑惑に絡んで行われたコミー前米連邦捜査局(FBI)長官の議会証言や、メイ首相率いる与党・保守党の苦戦が見込まれた英総選挙など、前半は「政治リスク」が意識されて弱含む場面が目立ったが、13-14日の米連邦公開市場委員会(FOMC)を境に流れが反転した。FOMCは、0.25%の利上げを決めた上に、年内あと一回の追加利上げとバランスシート縮小の年内開始を示唆。その後、欧州中銀(ECB)も年内に緩和縮小に動くとの観測が強まった事で(英、加は利上げを模索)、「金融緩和からの『出口』に最も遠いのが日銀」との見方が広がった。欧州債利回りの上昇を起点に米長期金利が約1カ月半ぶりの水準に上昇する中、ドル/円も同様に約1カ月半ぶりの高値となる112.926円まで上値を伸ばした。



四本値	
OPEN	110.723
HIGH	112.926
LOW	108.787
CLOSE	112.417

2日	米5月雇用統計は失業率こそ4.3%と予想(4.4%)より良好な結果となるも、非農業部門雇用者数が13.8万人と予想(18.2万人増)を大きく下回った。平均時給前年比が+2.5%と予想(+2.6%)を下回った(前月比は予想通りの+0.2%)事も重しとなり、発表後はドル売りが活発化した。
7日	米上院特別情報委員会が、コミー前米連邦捜査局(FBI)長官の証言原稿を事前に公開。コミー氏はトランプ大統領のロシア関連疑惑について「大統領はフリン氏捜査の終了を希望」「大統領は忠誠を要求した」などとした。市場はこれを弾劾事由に当たる司法妨害を示す内容ではなかったと受け止めたようで米国株が上昇する中、円がほぼ全面安の展開となった。
14日	米5月消費者物価指数は前年比+1.9%と市場予想(+2.0%)を下回った。コア指数も前年比+1.7%と市場予想(+1.9%)下回り、2年ぶりの低い伸び率に留まった。また、米5月小売売上高は前月比-0.3%と予想(±0.0%)を下回り、落ち込みは1年4カ月ぶりの大きさとなった。自動車を除いた売上高も前月比-0.3%と予想(+0.1%)に反して減少した。これらを受けてドル売りが活発化すると一時109円台を割り込んで下落したが、米連邦公開市場委員会(FOMC)が政策金利を予想通りに1.00-1.25%に引き上げると発表した後は持ち直した。FOMCは声明でバランスシートの正常化プログラムを年内に開始する方針を正式に示した。同時に発表した金利見通しでは、中央値で年内あと1度の利上げを見込んでいる事が明らかになった。また、その後の会見でイエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長は「数回のインフレ指標に過剰反応しない事が重要」などと述べて、足元のインフレ指標の鈍化を重視しない姿勢を示した。
16日	日銀は予想通りに金融政策の現状維持を発表。黒田総裁はその後の会見で「現時点で出口での収益試算公表するのはかえって混乱招く」「現時点で出口の具体的な手法・順序を示すのは難しい」などと述べて出口戦略に慎重な姿勢を示した。これを受けて一時円安が進んだが、米5月住宅着工件数が109.2万件と予想(122.0万件)を大きく下回ったのに続き、米6月ミシガン大消費者信頼感指数・速報も94.5と予想(97.0)を下回るとドル売りが強まりドル/円は上げ幅を失った。
19日	ダドリーNY連銀総裁が講演で「失業率が4.3%に低下し、インフレ率が1.5%程度で推移する現在の状況は『極めて良好』だ」「インフレ率は望ましい水準を若干下回っているものの、労働市場の引き締めりが続き賃金も少しずつ持ち直す事で、2%の目標に緩やかに回帰するだろう」などと述べた事が伝わると、米長期金利の上昇とともにドル買いが強まった。
27日	欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が「デフレ圧力はリフレに変わった」などと発言した事を受けて早期の緩和縮小観測が広がり欧州債利回りが上昇。これにつれて米債利回りも上昇したため、ドル買い・円売りが強まった。その後、米6月消費者信頼感指数が118.9と予想(116.0)を上回った事もドル買いを後押しすると一時112.40円台まで上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

USD/JPY

米2年債利回

OPEN	1.2858%
HIGH	1.3856%
LOW	1.2620%
CLOSE	1.3817%

米10年債利回

OPEN	2.2097%
HIGH	2.3072%
LOW	2.1013%
CLOSE	2.3037%

日経平均

OPEN	19692.16
HIGH	20318.11
LOW	19686.32
CLOSE	20033.43

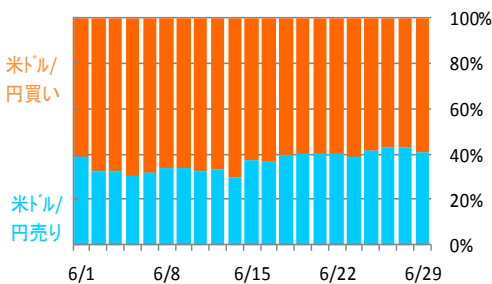
NYダウ平均

OPEN	21030.55
HIGH	21535.03
LOW	20994.22
CLOSE	21349.63

6月のポジション動向

7月の日・米注目イベント

米ドル/円ポジション指数



- ・日銀短観(3日)
- ・6月米ISM製造業景況指数(3日)
- ・FOMC議事録(5日)
- ・6月米ADP全国雇用者数(6日)
- ・5月米貿易収支(6日)
- ・6月米ISM非製造業景況指数(6日)
- ・6月米雇用統計(7日)
- ・G20首脳会議(7-8日)
- ・6月米生産者物価指数(13日)
- ・6月米小売売上高(14日)
- ・6月米消費者物価指数(14日)
- ・6月米鉱工業生産(14日)
- ・6月米住宅着工件数(19日)
- ・日銀金融政策決定会合(19-20日)
- ・7月米消費者信頼感指数(25日)
- ・米FOMC(25-26日)
- ・6月米耐久財受注(27日)
- ・6月日本消費者物価指数(28日)
- ・4-6月期米GDP・速報値(28日)

7月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

足元でドル/円相場との高い連動性を見せる米10年債利回りは、6月終盤に2.30%前後まで持ち直したが、依然として5月に付けた直近ピークの2.40%前後を下回っている。欧州債利回りの上昇につれて低下幅を縮小したとはいえ、肝心の米国景気に息切れ感が出ており、インフレ率が鈍化傾向にある事が重しとなっているようだ。7月相場において米長期金利とドルが一段の上昇を示現するためには、そうした重しを取り払う必要があるだろう。それができなければいずれも6月の上げ幅を吐き出してしまう事も考えられる。米連邦公開市場委員会(FOMC)が「(金融政策の)道筋は経済データ次第」としている事もあって、6月雇用統計(7日)はもとより、6月小売売上高や6月消費者物価指数(いずれも14日)、4-6月期国内総生産(GDP)・速報値(28日)などの経済指標の結果が重要な意味を持ちそうだ。なお、米金利先物市場では、年内に少なくとも1回の利上げ(0.25%)が行われる確率は5割前後となっている。いわゆる「五分五分」という状態で、追加利上げを織り込んで長期金利上昇とドル高が進む余地がある一方、利上げ見送り観測と失望のドル安が進む余地もあるという事になる。こうした中、7月のドル/円相場は年内追加利上げの可能性を探りつつ、米経済指標の結果に一喜一憂する展開が見込まれる。(神田)

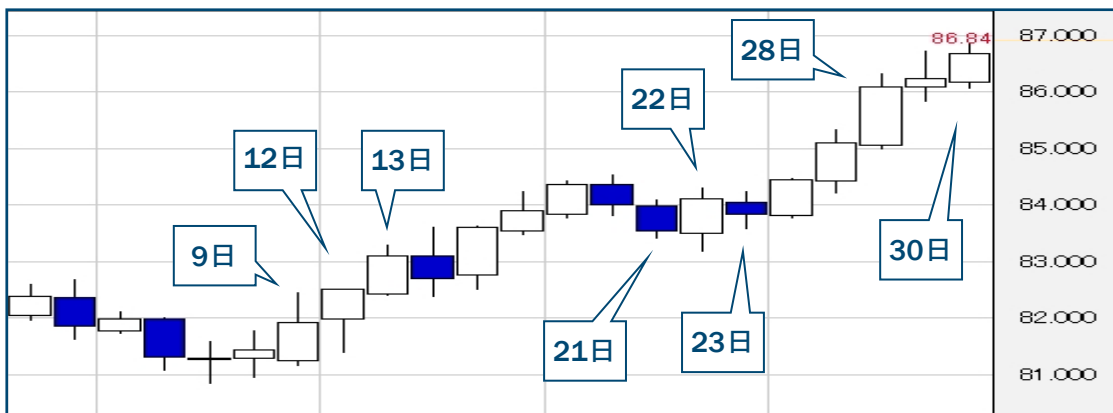
(予想レンジ:109.500~115.000円)

カナダ/円 6月の推移

CAD/JPY

6月のカナダ/円相場は80.861～86.849円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約5.7%の大幅上昇(カナダドル高・円安)となった。

12日に加中銀(BOC)のウィルキンス副総裁が、13日にポロズ総裁が、それぞれ利上げに前向きな発言を行ったことで、7月利上げ観測が急浮上。一時42ドル前半まで下落したNY原油先物が持ち直した事や、NYダウ平均が史上最高値圏で高止まりした事などによるリスク・オンの流れもカナダドルの上昇を後押しすると、30日に2月以来の高値となる86.849円まで一段高となった。



四本値

OPEN	82.050
HIGH	86.849
LOW	80.861
CLOSE	86.699

9日	加5月雇用統計は失業率こそ6.6%と前月(6.5%)から上昇するも、就業者数は予想(+1.50万人)を大きく上回る+5.45万人となったほか、労働参加率は前月より0.2%上昇して65.8%となった。失業率上昇はより多くの人々が労働市場に戻ってきたためと解され、カナダドル買いが強まると、カナダ/円は82.40円前後まで上昇した。
12日	ウィルキンスBOC副総裁が「国内経済が成長を続ける中で、中銀は政策金利を過去最低水準に維持するべきかどうか点検」と発言。市場では利上げ示唆発言と解され、カナダドル買いが活発化した。
13日	ポロズBOC総裁が「国内経済は原油相場の急落による落ち込みから回復しており、15年に実施した利下げはその仕事をほぼ終えた」と発言。前日のBOC副総裁に続いてのタカ派的発言を受けてカナダドルが一段高となった。
21日	供給過剰懸念を背景に、NY原油先物が昨年8月以来となる42ドル台まで下落した事が重石となり、カナダ/円は一時83.40円台まで値を下げた。
22日	4月加小売売上高が前月比+0.8%、除自動車も同+1.5%と予想(+0.3%、+0.7%)を大きく上回った。原油高の影響もあり、84.30円台まで上昇した。
23日	加5月消費者物価指数が前年比+1.3%、コア前年比+1.3%と、いずれも予想(+1.5%、+1.4%)を下回る伸びに留まった。これを受けてカナダ/円は83.60円前後まで下落した。
28日	ポロズBOC総裁が「2015年の計0.50%の利下げ後、金利は『異常に低い』水準にある」「利下げがその役目を果たしたように見える」などと発言。一時43ドル台まで急落したNY原油先物が持ち直した事もあり、カナダ/円は86円台を回復した。
30日	加4月国内総生産(GDP)は前月比+0.2%、前年比+3.3%(予想:+0.2%、+3.4%)であった。ただ、NY原油先物が46ドル台を回復した事や、NYダウ平均が堅調に推移した事などから、カナダ/円は3月以来の高値となる86.80円台まで上昇した。

加10年債利回り

OPEN	1.420%
HIGH	1.778%
LOW	1.373%
CLOSE	1.762%

N Y 原 油

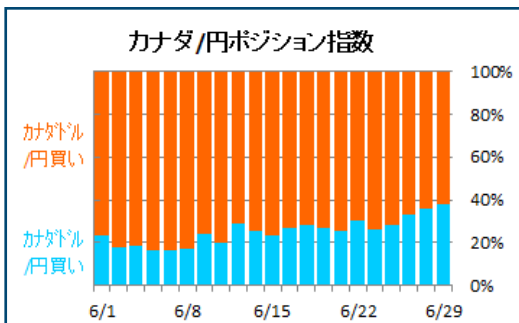
OPEN	48.63
HIGH	49.17
LOW	42.05
CLOSE	46.04

NYダウ平均

OPEN	21030.55
HIGH	21535.03
LOW	20994.22
CLOSE	21349.63

6月のポジション動向

7月のカナダの注目イベント



- ・5月加貿易収支(6日)
- ・6月加雇用統計(7日)
- ・6月加Ivey購買部景況指数(7日)
- ・6月加住宅着工件数(11日)
- ・BOC政策金利発表(12日)
- ・5月加新築住宅価格指数(13日)
- ・6月加消費者物価指数(21日)
- ・5月加小売売上高(21日)
- ・5月加GDP(28日)

7月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

先月、複数のBOC要人から利上げに前向きな発言が相次いだ事から、市場の関心は今月12日のBOC理事会に集まっている。金利先物市場では、今月理事会での利上げ確率が、6月上旬の5%前後から84%(執筆時点)まで急上昇している。ただ、BOCが重視するインフレ率は、直近では伸びが鈍化しており、早急な利上げに動く公算が小さいとの見方もある。利上げが実施されれば教科書的には加ドル買い材料となろう。その動きが持続するかは、声明で年内の追加利上げを示唆するかがカギと見る。

また、一部通信社が先月30日に発表した石油輸出国機構(OPEC)加盟国の6月産油量について、減産を免除されているナイジェリアとリビアの増産により、年初来の最高水準であった事が明らかとなった。OPEC加盟国間で減産強化について意見がまとまっていないほか、米国の増産観測が根強い事から、このまま原油相場が反発局面に向かうのは容易ではないと見る。NY原油先物が先月安値(42.05ドル)を割るようだと、2016年2月安値~2017年1月高値の1/2戻し(40.65ドル)まで下値余地が拡大する公算である。その場合はカナダ/円相場の重石となるだろう。(川畑)

(予想レンジ: 84.500~90.700円)